

文化薫道

◆其の四十六 昔の名前で出ています

古い文献や地図を見てみると、身近にある山や川の名前が、私たちが知っているものと違ってすることに気がつきます。

例えば、菅原道真公の伝説に関係が深い「天拝山」は、江戸時代には、「天判山」とも呼ばれていたことが知られています。

宝満山についても、平安時代以降の歌に「御笠山」や「竈門山（かまどやま）」と詠まれるなど、現在と違う名前や複数の名前が使われていたことが分かっています。

このように地域や時代によっていくつもの名前があることは特別なことではなかったようです。これが明治時代の中頃になると様子が一变します。

明治20年代の地図には「竈門山（宝満山を併記）」「天拝山」とあり、観光案内本にも、「天拝山（天判山ともいう）」「宝満山（古称、竈門山・御笠山）」と書かれるようになります。

さらに明治30年代の地図になると山の名前は、「天拝山」や「宝満山」の他にも「愛

嶽山」「頭巾山」

「三郡山」「宮地

嶽」「基山」など

私たちのよく知るものとなりま

す。これは、そ

れまでの多様な

呼び名が、一つ

の名称に統一さ

れていくことの

現れと考えられます。

河川の場合ももっと複雑で、江戸時代には同じ川でも旧村単位によって川の呼び名が違っていました。現在の名前にはほぼ統一されるのは、山の名前と同じく、明治30年代のようです。

このような山や川の名前の変化は、明治時代中頃になって軍事や行政の中央集権化が進み、地名などを統一する必要性が高くなったことによると考えられます。元々は、人々の生活に根ざしていた地域ごとの名称が、国の近代化とともに、画一化されていったのでしょ

う。社会の変化と「山」や「川」の名前の変化が連動していることは、非常に興味深く感じられます。

問い合わせ先／文化財課



宝満山を望む

